

論文

古高ドイツ語における命令・要求表現について

——オトフリートの『福音書』（9世紀）を中心に——

鈴木 康 志

要 旨

ドイツにおいても命令文の研究は現代ドイツ語に関するものが中心である。そこで今回中高ドイツ語、現代ドイツ語への繋がりを明らかにするため、古高ドイツ語（750～1050年）における命令・要求表現について、オトフリートの『福音書』（9世紀）で調べてみた。古高ドイツ語の *du* に対する命令文は、形態的には強変化動詞が語尾なしで終わるのに対して、弱変化動詞がテーマ母音で終わること、2人称複数による敬称表現がまだはっきり現れていない点が高ドイツ語との大きな相違である。その他の特色としては、*wesan* (*sein*) の命令形 *wis*, *weset* とならんで接続法の *sis* がすでに命令形として用いられていること、主語をともなった命令文、代動詞としての *duan* (*tun*) の多用、条件的命令文や *-mes* の語尾をもつ勧誘表現や接続法による要求、願望表現がみられる。また、現代ドイツ語では不可能である、命令文が副文に組み込まれる例もある。さらに話法の助動詞による命令文の代用形もすでに現れている点などである。

キーワード：命令文 (*Imperativ*)、命令・要求表現、古高ドイツ語、オトフリートの『福音書』、話法の助動詞、接続法、勧誘表現

はじめに

わが国ではもとより、ドイツにおいても命令文 (*Imperativsatz*) の研究はほとんどが共時

的な研究、つまり現代のドイツ語における命令文の研究である。(Bosmanszky (1976), Donhauser (1986), Winkler (1989), Rosengren (1993), Markiewicz (2000), Wratil (2005) など)¹⁾。唯一通史的な研究として知られているのは Simmler (1989) の「ドイツ語の命令文とその代用形の歴史」である。これは古高ドイツ語と中高ドイツ語を中心に扱ったものであり、例文は「ベネディクト会会則 (Benediktinerregel)」というやや特殊なものである。内容も代用形の不定詞の記述に多くが割かれている。そこで本稿では古高ドイツ語ではどのような命令・要求表現があり、どのような特色をもっているかをオトフリートの『福音書』(9世紀)の命令文を中心に考察してみたい。ただし、古高ドイツ語が簡単に読める訳ではないので、テキストは現代ドイツ語訳付きのレクラムの抜粋版 Otfrid von Weissenburg Evangelienbuch Auswahl (2010年)を使用し、その他は Oskar Erdmann 版の Otfrids Evangelienbuch (1973年)とやや古い Johann Kelle の現代ドイツ語訳“Christi Lenen und Lehre”(1870年)を参照した。古高ドイツ語といっても統一した言語がある訳ではなく、各地に部族言語(方言)があり、本稿ではラインフランケン方言のオトフリートの『福音書』の一部の調査にすぎないが、古高ドイツ語を代表するものの一つである。

調査では、レクラム版と新保(1993)と重なる箇所は、新保の古高ドイツ語の詳細な注釈と訳を参考に古高ドイツ語のテキスト全体を調べ²⁾、レクラム版のそれ以外の箇所は、レクラム版の現代ドイツ語訳をまず読み、その命令文はもとより、接続法、話法や使役の助動詞により、命令、要求、依頼、願望などが表されている箇所はすべてオリジナルの古高ドイツ語を辞書や文法書を参考にチェックした。そのため7000行を超えるオトフリートの『福音書』における命令・要求表現の一部を調べたに過ぎないが、抜き出した例文から、古高ドイツ語における命令・要求表現の一定の特色は理解できると思われる。

1. 古高ドイツ語(750~1050年)における命令形の形態

ドイツ語では、2人称単数の命令形だけが、独自で、-(e)stの語尾をもつ直説法や接続法の2人称単数形とはっきりと区別される形態をもっている。それは古高ドイツ語においても同じである。ただし、現代のドイツ語と異なり、古高ドイツ語では2人称単数の命令形の形態は、強変化動詞と弱変化動詞との間にはっきりとした区別がある。弱変化動詞の2人称単数の命令形は -i, -o, -e というテーマ母音で終わるのに対して、強変化動詞は一部を除き³⁾、子音で終わる。例えば強変化動詞 nēman (nehmen) の直説法現在、接続法 I 式、命令形の語形変化は以下のようになる⁴⁾。

		nēman (nehmen)
直説法・現在・単数	1人称	nim-u

古高ドイツ語における命令・要求表現について

		2 人称	nim-is
		3 人称	nim-it
	複数	1 人称	nēm-umēs, -amēs, -emēs; (-ēm)
		2 人称	nēm-et (nēm-at)
		3 人称	nēm-ant
接続法・I 式・単数		1 人称	nēm-e
		2 人称	nēm-ēs
		3 人称	nēm-e
	複数	1 人称	nēmē-m, (-amēs, -emēs)
		2 人称	nēm-ēt
		3 人称	nēm-ēn
命令形	単数	2 人称	nim
	複数	1 人称	nēmamēs, -emēs; nēmēm
		2 人称	nēmet, (nēmat)

nēman のような強変化動詞の場合、2 人称単数の命令形は、直説法 2 人称単数 nimis から語尾 -is をとった形 nim である。また、複数 2 人称に対する命令形は、直説法と接続法 2 人称複数と同じ形態 (nēmet) であることがわかる。

次に弱変化動詞をみてみよう。古高ドイツ語の弱変化動詞は語尾によって 3 つに区分される。第 1 類は -en, 第 2 類は -ōn, 第 3 類は -ēn の語尾である。同様に直説法現在と接続法 I 式の人称変化と命令形をみてみよう⁵⁾。

	suochen (1 類)	salbōn (2 類)	habēn (3 類)
	(suchen)	(salben)	(haben)
直・現・単	1. suoch-u	salb-ōm, -ōn	hab-ēm, -ēn
	2. suoch-i	salb-ōs, -ōst	hab-ēs, -ēst
	3. suoch-it	salb-ōt	hab-ēt
複	1. suoch-emēs	salb-ōmēs, salb-ōn	hab-mēs; hab-ēn, -ēēn
	2. suoch-et	salb-ōt	hab-ēt
	3. suoch-ent	salb-ōnt	hab-ēnt
接・I・単	1. suoch-e	alb-o	hab-e
	2. suoch-ēs, -ēst	salb-ōs(t)	hab-ēs(t)
	3. suoch-e	salb-o	hab-e

命	複	1. suoch-ēm, -en	salb-ōm, -ōn	hab-ēm, -ēn (-ēmēs)	
		2. suoch-ēt	salb-ōt	hab-ēt	
		3. suoch-ēn	salb-ōn	hab-ēn	
	単	2. suochi	salbo	habe	
		複	1. suochemēs, ēn	salbōmēs, salbōn	habēmēs, habēn, -ēēn
			2. suochet	salbōt	habēt

上記のように弱変化動詞の場合 2 人称単数の命令形では、第 1 類は *suochi* のように *-i*、第 2 類は *salbo* のように *-o*、第 3 類では *habe* のように *-e* といったテーマ母音で終わることになる。なお、複数 2 人称の直説法と接続法と命令形は同じ形態 (*suochet, salbōt, habēt*) である。すると古高ドイツ語の命令形の形態は以下のように図示される⁶⁾。

古高ドイツ語	命令形の形成原理	強変化動詞	弱変化動詞
du	語幹 ↗ テーマ母音なし (強変化動詞) ↘ テーマ母音 (弱変化動詞)	nim Ø	
			biti, suochi, salbo, habe -i -i -o -e
ir	—et	nēmet	suochet, habēt

2. オトフリートの『福音書』とレクラム抜粋版における命令形の統計資料

オトフリートの『福音書』はアルザス地方のヴァイセンブルク修道院の僧オトフリート (Otfrid) によって書かれたキリストの生涯を描いた脚韻形式の宗教叙事詩である。本文 5 巻 (1 巻 28 章, 2 巻 24 章, 3 巻 26 章, 4 巻 37 章, 5 巻 25 章) 7104 行と 3 献呈詩 (312 行) からなり、863 年から 871 年に成立したと推定される。すでに触れたように、古高ドイツ語という統一した言語がある訳ではなく、オトフリートの『福音書』は南フランケン方言によるものであるが、この作品はラテン語聖書の翻訳ではなく、オトフリートの創作であり、作品は断片ではなく、完全な形式で伝承されている。この作品はまた古高ドイツ語を代表する作品の一つであるとともに、すでに様々に研究され言語学的な考察の対象としても条件の整ったものである⁷⁾。それは古高ドイツ語の命令・要求表現について、中高ドイツ語や現代ドイツ語との言語学的な比較を通時的に行う場合も当てはまると思われる。

以下の統計資料に関しては、() 内は不定詞とその現代語訳、命令形が現れる『福音書』の巻数 (ローマ数字) と章 (ボールド) と行数を表す。なお L はルートヴィヒ・ドイツ王への献呈詩である。また [] はレクラム抜粋版以外から用いた例文の動詞である。

強変化動詞 [stV] (du(thu) に対して) 特殊動詞も含む

lâz (lâzan (lassen): L.35, 94, I.1.41, 47, 48, I.2.40, III.1.31), nim (neman (nehmen): I.1.18), dua (duan (tun): I.2.3.48, III.1.20, 28, IV.17.21, V.23.13, 81, 97, 107, 117, 147, 159), (gi)scribe (scriban (schreiben): I.2.11), wis (wesan (sein) I.3.29), firnim (firneman (vernehmen) I.3.30, II.9.75, 87), sih (sehan (sehen) I.3.41), lis (lesan (lesen): II.9.71, III.14.4, 65), firlih (firlihan (verleihen) III.1.43), fâr (farân (fahren) III.14.47). [stig (stigan (steigen) IV.30.28), wird (werdan (werden) I.4.66)] **基本的に語尾なしであるが, dua, wis は特殊動詞。

強変化動詞 [stV] (ir に対して)

fernemet (ferneman (vernehmen) II.9.7), nemet (neman (nehmen) III.14.99), lazet (lâzan (lassen) III.14.100), irbîntet (irbintan (losbinden) IV.4.10), brînget (bringen (bringen) IV.4.10). [weset (wesan (sein) IV.7.9), leset (lesan (lesen) III.20.150)]

弱変化動詞 [swV] (du (thu) に対して) 特殊動詞も含む

súaz (suazen (süd machen) L.36), ili (ilen (streben) I.1.37, 45, II.9.66), dihto (dihtôn (dichten) I.1.49), (gi) fúagi (fuagen (fügen) I.1.71, III.14.71), theni (thenen (ausdehnen) I.2.4), dilo (dilôn (tilgen) I.2.20), ginado (ginâdôn (Gnade tun), I.2.25), hugi (huggen (gedenken) I.2, 26, 27, 3.29, II.9.93), widarwerto (widarwertôn (entgegentreten) I.2.29), rihti (rihten (ordnen) I.2.32), thiono (thionôn (dienen) I.2.41), zéli (zellen (zählen) I.3.36), brútti (brutten (erschrecken) I.5.17), wenti (wenten (wenden) I.5.18), zuívolo (zuívalôn (zweifeln) I.5.28), sage (sagên II.8.45), drahto (drahtôn (überlegen) II.9.65), bilido (bilidôn II.9.67), irfulli (irfullen (erfüllen) II.9.91), gilóko (gilockôn (lindern) III.1.32), scirmi (scirmen (beschützen) III.1.41), heili (heilen IV.4.49), bréiti (breiten (ausbreiten) IV.4.50), irkenn(i) (irkennen (erkennen) IV.5.5, IV.17.21), gilóubi (gilouben (glaube) IV.5.34, V.19.15), biscirmi (biscirmen (beschützen) V.23.11, 79, 95, 105, 115, 145, 157), leití (leiten (führen) V.23.183, 193, 205, 231, 241, 255, 269, 283, 295).

**基本的にテーマ母音 (-i, -o, -e) で終わっているが, 弱変化動詞 I 類の -i は省略されることがある (suaz < suazi, irkenn < irkenni)。Braune/Eggers (1997: 264. Anm. 4) 参照。

弱変化動詞 [swV] (ir に対して)

saget (sagan (sagen) IV.4.12), zellet (zellen (anrechnen) V.25.30).

3. 古高ドイツ語命令文の形態（実例）と特色

1) オトフリートの『福音書』における命令形の形態

上記の命令文の統計的資料から、古高ドイツ語における具体的な命令文の形態を実例でみてみよう⁸⁾。

- (1) **Lángo**, líobo druhtin mín, **láz** imo thie dága sin, (Otfrid: L.35.)
 親愛なる神よ、王を長く生き長らせてください。
- (2) **Húgi** weih thir ságeti, ni **wis** zi dúmpmuati,
firním thesa léra, ... (Otfrid: I.3.29–30.)
 私があなたに言ったことを考えなさい、あまりに無思慮でないように
 この教えに耳を傾けなさい。
- (3) **Drahto** io zi gúate so waz thir gót gibiate;
ili iz io irfüllen mit mihilemo willen;
Bilido ío filu frámm thesan héilegon man: (Otfrid: II.9.65–67.)
 なにであれ、神が命じることを益と考え、
 いつも喜んで実行するように努めなさい。
 この聖なる人をいつも手本としなさい。
- (4) **Fernémet** sar in rihti, thaz Krist ther brútigomo si, (Otfrid: II.9.7.)
 キリストが花婿であることを素直な気持ちで聞きなさい。

例文 (1) の **láz** は強変化動詞 *lāzan* (lassen) の 2 人称単数の命令形、例文 (2) の **húgi** は弱変化動詞 *huggen* (denken) の、**wis** は *wesan* (sein) の 2 人称単数に対する命令形、**firním** は強変化動詞で *firneman* (vernehmen) の 2 人称単数に対する命令形である。例文 (3) の **drahto**, **ili**, **bilido** は弱変化動詞 *drahtôn* (überlegen), *îlen* (streben), *bilidon* (nachbilden) の 2 人称単数に対する命令形、例文 (4) の **fernēmet** は *ferneman* の 2 人称複数形に対する命令文である。強変化動詞 *lāzan*, *firneman* の 2 人称単数に対する命令形が、語尾なし (**láz**, **firním**) であるのに対して、弱変化動詞 (*huggen*, *drahtôn*, *îlen*, *bilidon*) の 2 人称単数に対する命令形 (**higi**, **drahto**, **ili**, **bilido**) は、テーマ母音の *-i* *-o* で終わっている。また複数形に対する命令形は直説法と同じ *fernemet* である。なお、*huggen* のように子音が重複する場合は **hug** のように単純化される。(Braune/Eggers (1987: 264) 註 1 参照)

2) 敬称 2 人称複数による敬称表現

ゲルマン語においては、2 人称単数への呼称 (Anrede) には、ただ一つの代名詞 **pu** (**du**)

が用いられていた (Simon (2003: 93))。古高ドイツ語においても当初身分のいかんを問わず *duzen* が用いられていたが、しだいに 2 人称複数 *ir* (*ihr*) が敬称的な呼称として用いられるようになる。Simon (2003: 94) は 2 人称単数への呼称の代名詞 *ir* の最も初期の使用例としてオトフリート (800~875 年) が残したコンスタンツ司教にあてたドイツ語の手紙の例をあげている。

- (5) Oba ir hiar findet iawiht thés thaz wírdig ist thes lésannes:

もしあなたがここで読むに値すると思うものを見つけられたら

(Otfrid: Salomoni episcopo Otfridus. 7. S.28. (Simon (2003: 94)))

しかしながら古高ドイツ語において敬称の呼称としての *ir* がはっきりとしないのは、例えばオトフリートにおいて上記の司教への手紙には *ir* が数例現れながら、Simon によればオトフリートの『福音書』主要部にそれが 1 例も見出せない、とのことである。確かに調べた範囲のオトフリートの『福音書』における命令・要求表現をみても、要求表現は接続法 I 式 3 人称単数の要求話法か、*du* に対する命令文が中心で、*ir* に対するものがあっても (*fernemet* (II.9.7), *nemet* (III.14.99), *lazet* (III.14.100), *irbintet*, *bringet* (IV.4.10), *saget* (IV.4.12), *zéllet* (V.25.30) など)、複数 2 人称に対するものと考えられ (例文 (6), (7) 参照)、2 人称単数に対する命令形に敬称の *ir* 形式が用いられているものはない。統計資料からも伺えるように、2 人称複数 *ir* の命令形が敬称としてはっきり表れるのは中高ドイツ語の時代になってからであろう。詳しくは鈴木 (2018b) 参照。

- (6) “wíht”, quad, “ságen ih iu thaz, ni nemet scázzes umbi tház,

iu lazet únthrata thero wóroltliuto míata. ...”

(Otfrid: III.14.99f.)

主は言った「あなた方に命じておくが、そのことでお金をとってはならぬ、人の報酬を価値なきものとしなさい。」

- (7) thia irbintet ir thár joh bringet ouh thaz fúlin sar.

Ob íaman thes bigínne thaz ér iz iu ni hénge:

saget thio thúrfti imo in wár;

(Otfrid: IV.4.10–12.)

そのロバを放し、ロバの子も一緒に連れてきなさい。

もしだれかがそれを拒もうとしたら、ロバは必要とされることをありのままに話しなさい (とイエスは二人の弟子に命じた)。

上記の例文はキリストが複数の弟子に述べた命令文で、敬称を表すものではない。

3) sein 動詞の命令形

現代ドイツ語の *sein* は、古高ドイツ語では *sîn*, *wesan* の二つがあった。*wesan* には命令形 2 人称単数 *wis* と複数形 *weset* があったが (例文 (8), (9), (10))⁹⁾, *sîn* には命令法の形態は

なかった。しかしすでに9世紀オトフリートの『福音書』や『ターティアン』¹⁰⁾に一部ではあるが、*sîn*の接続法2人称単数 *sîs(t)* と複数形 *sît* が、3人称に対する要求話法ではなく、*wis, weset* とならんで命令に用いられている(例文(11), (12))。

- (8) In Aegypto wis (sei) thu sár, (Otfrid: I.19.5.)
 まずエジプトにいなさい。
- (9) „Góumet“, quad ér, „thero dáto joh weset (seid) gláwe thrato, ...“ (Otfrid: IV.7.9.)
 主は言った「自らの行為に留意し、注意深くあれ！」
- (10) weset (seid) ir thuruhthigané (Tatian 32.10.)(Held (1903: 10) より)
 汝ら、完璧であれ！
- (11) Thú sîs (sei) jungoro sîn. (Otfrid: III.20.131.)(高橋 (1994: 173) より)
 汝は彼の弟子であれ。
- (12) sît (seid) givago iuwara libnara. (Tatian 13.18.)(高橋 (1994: 173) より)
 汝らの報酬で満足しろ。

その後接続法の複数形 *sît* は、*weset* とともに中高ドイツ語(1050~1350年)以後において命令形として理解されるようになり、古い2人称複数の命令形の形態 *weset* をしだいに排除した。中高ドイツ語では、2人称単数の命令形 *wis* はまだ用いられたが、さらに複数形 *sît* に対して、古い2人称単数の *wis* の代わりに単数形の *sei* が用いられるようになる。(Paul (1958: 156f.), Dal (1966: 139), Braune/Eggers (1987: 303) 参照) つまり、古高ドイツ語、中高ドイツ語において命令形を保持していた *wesan* は現代ドイツ語では消滅し、接続法であった *sît* が、本来命令形であったものを排除し、命令形として理解されるようになる。この接続法の用法がすでにオトフリートの『福音書』にみられる。

4) 主語のある命令文

現代ドイツ語においても様々な理由から命令文に主語が現れることがあるが¹¹⁾、オトフリートの『福音書』にもしばしば主語のある命令文がみられる。

- (13) Ili thu (du) zi nóte, theiz scóno thoh gilute, (Otfrid: I.1.37.)
 それが美しく聞こえるように熱心に努力せよ。
- (14) zéli thu (du) thaz kúnni, (Otfrid: I.3.36.)
 その世代を数えあげなさい。
- (15) drof ni zuívolo thu (du) thés. (Otfrid: I.5.28.)
 汝これを疑うな。
- (16) thes gilóubi thu (du) mír. (Otfrid: IV.5.34.)
 私を信じなさい。

Schönherr (2011: 65) は、主語代名詞使用の任意性は古高ドイツ語の一つの重要な特徴であるとともに、例文 (15) のような否定命令文では、主語人称代名詞は副詞 **drof** とともに否定を強める働きをしていると述べている。また例文 (16) に関してオトフリートには類例が II.14.61, III.20.178, V.1.34, 2.9., 19.15 などにもみられる。(Held (1903: 10))

5) 代動詞としての不規則動詞 **dua** (duan (tun))

特殊動詞 **duan** (tun) の命令形 **dua** は抜粋版だけでも 10 例現れる。これらは下記の現代ドイツ語訳 (lege, warte, verleihe 等) から明らかなように代動詞として用いられている。詳しくは武市 (1994) 参照。

(17) Fingar thinan **dua** anan múnd minan, (I.2.3.)

(**Lege** Deinen Finger auf meine Lippen. 現代ドイツ語訳)

あなたの指を私の唇におきなさい。

(18) ni **dua** iz zi spáti! (III.1.20.)

(**warte** nicht zu lang damit! 現代ドイツ語訳)

そんなに長く待つな。

(19) thie wizzi **dua** mir méron. (III.1.28., 武市 (1994: 57))

(**verleihe** mir Klugheit hierfür; 現代ドイツ語訳)

あなたの名誉のため、私の分別を増してください。

6) 条件的命令文

命令文の中には、形態的には命令形でも要求を表さない場合がある。その一つが条件的命令文 (der konditionale Imperativ) である。Erdmann (1886: 120) はすでにオトフリートに条件的命令文が現れることに触れている。

(20) **Leset** állo buah; ni findet ir. (Otfrid: III.20.155.) (Erdmann (1886: 120) より)

Wenn ihr auch alle Bücher leset, so findet ihr nicht. (現代語訳は Erdmann)

あなた方はすべての本を読んでも見つけれないだろう。

(21) **stig** nídar, wir gilóuben thir sár! (Otfrid: IV.30.28.) (Schönherr (2011: 72))

wenn du niedersteigst, so werden wir dir glauben (現代語訳は Schönherr)

もし十字架から降りたら、私たちはあなたを信じよう。

Erdmann や Schönherr の現代ドイツ語訳からも伺えるように、ここで **leset**, **stig** は「読め」「降りろ」という命令というより、「もし読んでも」「もし降りたら」という条件を表している。

7) 勧誘表現

勧誘表現には固有の形態はなく、直説法が用いられ (mēmanes, -emes), 接続法 (nēmen) と区別された。しかし古高ドイツ語では早くから勧誘表現に接続法が用いられ、この用法は9世紀に増え、直説法 -mes の勧誘表現の形を排除した。ただ、オトフリートの福音書ではこの -mes の形は勧誘法として保持されている。Braune/Eggers (1987: 262, 264), Liedtke (1998: 32)

(22) **farames** wír ouh rehto, ... (Otfrid: III.23.57.) (Behaghel 1928: 441)

まっすぐ歩いていこう。

(23) **Flihemes** thio úbili thiú únsih geit hiar úbiri,

ilemes gidróste zi hímilriche irlóste! (Otfrid: V.23.75f.)

ここでわれわれを圧倒している悪から逃れて
われわれの救済を信じて、天に急ごう。

Schönherr (2011: 77) は、古高ドイツ語は、勧誘表現のヴァリエーションとして sculan (sollen) + 不定詞という話法の助動詞による形を発展させたとして、以下の例文を Kelle の現代ドイツ語訳とともにあげている。

(24) Wir **scúlun** unsih sámanon zi réhteren **rédiñon**, (Otfrid: III.26.11.)

In unserem Kreise **lasset uns zu Rate geh'n** auf bessre Art, (Kelle: 267)

われわれのサークルでよりよいやり方で話し合おうではないか。

この代用形は、中高ドイツ語では wir suln (sollen) の形でまだ見られるが¹²⁾、この機能はしだいに wollen や lasst uns ~ の形が担うようになる。これは例文 (24) の現代ドイツ語訳が lasst uns ~ になっていることから伺える。

8) dass 節の独立文と副文に埋め込まれた命令形

Dass du ihr nichts sagst! (あなたは彼女になにも言わないで!) といった副文が、その形をそのまま保ちながら、従属すべき主文を暗黙裡に前提とし、独立的に要求表現として用いられるものである。命令、願望、感嘆文になるが、主語が2人称の場合要求文に、主語が3人称で接続法の場合は願望文になることが多い。中高ドイツ語にもみられるが¹³⁾、Erdmann (1886: 122) はすでにオトフリートに dass 構文による願望表現があることに触れている。

(25) **Thaz** sálig si in giwíssi thiú kindes úmbera sí. (Otfrid: IV.26.37.)

dass die selig ist, die unfruchtbar (kein Kind gebaren kann) ist.¹⁴⁾

子供が産めない女性も祝福されますように!

現代のドイツ語では命令文を副文に組み込むことができないが (*Hans sagte zu Monika, dass

(du) mein Buch lies!), 古いゲルマン語では命令文が副文に組み込まれることがある。

(26) Sís bimúnigot ..., **thaz** thu unsih nú **gidua** wís, ... (Otfrid: IV.19.47f.)(高橋 (1994: 173))

*sei aufgefordert, **dass** du uns nun bekannt **mache**.

sei aufgefordert, **dass** du uns nun bekannt **machen sollst**. (拙現代ドイツ語訳)

汝は、我らに今知らせよと頼まれてあれ。

この例文に関して高橋 (1994: 173) は「命令・依頼の主文 (sís bimúnigot) に続く *ahd.thaz* 文において、叙想 (接続) 法形ではなく、命令法形 (*wís gidua*) が使用されている場合 [() 内は筆者]」と記している。邦訳も高橋 (1994) から借用させていただいたが、高橋は、命令文の主文に続く従属文は一般に接続法になるが、ここでは命令形が用いられている例とする。一方 Weinhold (1967: 379) は「グリムがギリシャ語と (古・中高) ドイツ語で同じものとして例証した、従属文における 2 人称命令形ととることもできる」としている。すでに触れたように、現代ドイツ語では、命令文は副文や間接話法に組み込むことは不可能で、話法の助動詞 *sollen* など書き換えるしかない。中高ドイツでも *was du tuo* (*was du tu*) といった固定された構造しかないのに対して、古高ドイツ語においてはこのような命令文の副文への組み込みが可能であったことは興味深いことである¹⁵⁾。

9) 話法の助動詞

話法の助動詞による命令文の代用表現もすでに古高ドイツ語でもみられる。特に重要なものは (*sculan* (*sollen*)) である (例文 (25), (26))。 *mugan* (*mögen*) は発話者の祈念を表す (高橋 (2015: 90))。 *wellen* (*wollen*) では接続法が命令の代用となっている。また *ni tharf* は *nicht brauchen* の意味である。ただ、代用形式が盛んに用いられるのは 12 世紀以後のため、中高ドイツ語ほど頻繁にはみられないように思われる¹⁶⁾。

(27) thes **scal** er góte thankon; (Otfrid: L.25.)(Erdmann (1886: 122))

そのことに王は神に感謝すべきであろう。

(28) ni **scáltu** (*scalt* thu) *queman wídorort!* (Otfrid: IV.18.26.)

おまえは (ペテロ) はここに戻ってきてはならない。

(29) *queman* **mág** uns *thaz in múat!* (Otfrid: V.19.36.)(Schönherr (2011: 89))

それが私たちの心の中に入ってきますように!

(30) *bimídan* thu ni **wólles**, (Otfrid: III.20.132.)

汝はそれを避けようと欲してはならない。

(31) *then weg man fórahten* **nie thárf!** (Otfrid: IV.5.42.)(Schönherr (2011: 90))

この道を恐れる必要はない。

10) 接続法による願望表現

オトフリートの『福音書』（9世紀）の「ルートヴィヒ・ドイツ王にあてた献呈詩」で、接続法によって願望が表現されている例をみてみよう。参考のため（ ）内にレクラム版の現代ドイツ語訳を添えた¹⁷⁾。

- (32) Thémo **si** íamer héili joh sálida giméini,
 druhtin **hóhe** mo thaz gúat joh **frew**e mo émmizen thaz múa (Otfrid: L.5–6.)
 (Heil und auch Segen **werde** ihm immer zuteil, der Herr **vermehr**e sein Glück und **erfreue**
 immerdar sein Herz. 現代ドイツ語訳)
 王にいく久しく平安と至福が与えられますように。
 主がこの王にいつも幸運をもたらし、王の心を喜びで満たしてくださるように。
- (33) then **spár** er nu zi líbe uns állen io zi líab. (Otfrid: L.28.)
 (er **schütze** sein Leben zu unser aller steter Freude. 現代ドイツ語訳)
 私たちすべての絶えない喜びのため、神が王の命を守ってくださいますように。
- (34) Níazan **múazi** thaz sin múat io thaz éwiniga gúat; (Otfrid: L.93.)
 (Sein Herz **möge** sich stets des ewigen Heils erfreuen, 現代ドイツ語訳)
 王の魂が永遠の至福を受けることができますように。

si は古高ドイツ語 sin (sein) の接続法 I 式 3 人称単数で、現代ドイツ語の sei にあたり、要求話法の用法である。また hóhe (erhöhe), frewe (erfreue) も接続法 I 式 3 人称単数で、ともに要求話法の用法である。主語は最初の文が héili (Heil [平安]) と sálida (Wohlergehen [至福]), 次の文は druhtin (der Herr [主]) であり、すでに 3 人称に対する要求が接続法 I 式で表現されている。例文 (33) の spár は sprarôn (schützen) の接続法 3 人称単数の要求話法、主語は er (神) である。例文 (34) の múazi は話法の助動詞 muaz (mögen) の接続法 3 人称単数 (新保 (1993: 20)) で、現代ドイツ語の möge に対応する。thaz sin muat (王の魂) が主語である。

まとめ

古高ドイツ語の du に対する命令文では、形態的には強変化動詞が語尾なしで終わる (nim) のに対して、弱変化動詞はテーマ母音で終わる (hugi, drahto) こと、2 人称複数による敬称表現がまだはっきり現れていない点が高ドイツ語との大きな相違である。また wesán (sein) の命令形 wis (単数), weset (複数) とならんで、2 人称接続法 sis がすでに命令形として用いられている。これは後に wesán の命令形を追いやることになる。その他の特色と

しては、主語 (thu) をともなった命令文、代動詞としての *duan* (*tun*) の多用、条件的命令文、*dass* 節独立文の要求・願望表現や *-mes* の語尾をもつ勧誘表現や接続法による要求、願望表現がみられることである。また、現代ドイツ語では不可能である、命令文が副文に埋め込まれる例もある。さらに話法の助動詞 *sculan* (*sollen*) などによる命令文の代用形もすでに現れている。

注

- 1) これらの文献の詳細に関しては鈴木 (2017d: 84) 参照。
- 2) 『オトフリートの福音書』は本文 5 巻 (1 巻 28 章, 2 巻 24 章, 3 巻 26 章, 4 巻 37 章, 5 巻 25 章) 7104 行と 3 つの献呈詩からなっている。レクラム版は 1 巻 1, 2, 3, 5, 11 章, 2 巻 1, 8, 9, 10 章, 3 巻 1, 14 章, 4 巻 1, 4, 5, 17, 18 章, 5 巻 17, 19, 23, 24, 25 章とルートヴィヒ・ドイツ王への献呈詩などで全体の 2 割強の抜粋版である。新保 (1993) は 1 巻 1, 3 章, 2 巻 8, 9 章, 3 巻 14 章, 4 巻 4, 17, 18 章, 5 巻 17, 18, 19, 25 章とルートヴィヒ・ドイツ王への献呈詩でレクラム版の約半分である。
- 3) 不定詞語尾 *-en* をもつ少数の強変化動詞 (例えば *bitten*) は、弱変化動詞の第 1 類と同じ語形変化をし、2 人称単数の命令形は *biti* で、母音で終わる。高橋 (1994: 69) 参照。
- 4) Braune/Eggers (1987: 255f.) 参照。なお、変化表は同書 256 ページと 257 ページの間に挿入された *Paradigmen der starken und schwachen Verba* (強変化動詞と弱変化動詞の語形変化表) によっている。
- 5) Braune/Eggers (1987), a.a.O. S.256f., 高橋 (1994: 70f.) 参照。
- 6) Donhauser (1986: 65) 参照。
- 7) オトフリートの『福音書』の概略は新保 (1993) の解説や荻野・齋藤 (2005: 48, 132) を参考にしている。
- 8) 古高ドイツ語の命令文の歴史的な形態については鈴木 (2017c) と記述が重なっている。
- 9) Schönherr (2011: 63) ではオトフリートの『福音書』における *wesan* (*sein*) の命令文 5 例 (単数の *wis* 3 例: I.18.40, I.3.29, V.10.6 と複数の *weset* 2 例: IV.7.9, IV.15.14) があげられている。Shimbo (1990: 233, 238) ではさらに *wis* 3 例 (III.1.44, IV.13.18, IV.29.2), *weset* 2 例 (II.17.20, II.19.19) があげられている。
- 10) シリア人ターティアンによるラテン語の『共観福音書』(2 世紀後半) の東部フランケン方言訳のこと (荻野・齋藤 (2005: 176))。sein 動詞の箇所のラテン語は *estote* である。
- 11) 命令文において主語が現れるケースとその例文に関しては鈴木 (2016: 84) 参照。ただ、オトフリートの場合、指示性、対比、話者の苛立ちといったコミュニケーション上の理由というより、Schönherr (2011: 66) が触れているように、聞き手に注意を喚起するためのものであろう。なお、*nu wird thu (du) stümmer. (I.4.66)* 「おまえは唾になれ」でも主語が現れるが、古高ドイツ語で *werden* の命令形が *wird* であったことがわかる。
- 12) 中高ドイツの *wir suln* による勧誘表現の例をみてみよう。
wir sulen im engegene hin nider zuo dem recken gân. (Nibelungenlied: 100, S.34)

- われわれは出迎えのため、あの騎士のもとへ降りていくことにしよう。
これ以外にも 687, 966, 1081, 1208, 1287 詩節など 10カ所以上に類例がみられる。
- 13) 中高ドイツ語における dass 節独立文の要求表現をみてみよう。
sô der kunic welle rîten, daz ir vil bereite sît. (Nibelungenlied: 596, S.176.)
また国王が出かけるときには、用意が整っているように。
これ以外にも 1408, 1480, 1632 詩節に dass 節の独立文がみられる。
- 14) この箇所はパッサウ研究滞在中の三瓶裕文教授を通して Hans-Werner Eroms 教授に、現代ドイツ語訳も含めご教授いただいた。記してお礼申しあげたい。
- 15) 現代のドイツ語や英語では命令文は副文（従属文）に組み込めないとするのが一般的であるが、Kaufmann (2012: 204ff.), Kaufmann/Poschmann (2013) は、条件付きではあるが現代ドイツ語に組み込まれた命令文があることに触れている。この点に関しては改めて触れてみたい。
- 16) Schönherr (2011: 87f.) は古高ドイツ語の助動詞の主意的使用 (voluntativer Gebrauch) として sculan, wellen, muagan, ni tharf をあげている。古高ドイツ語では使用頻度は高くないと思われるが、中高ドイツ語、例えば『ニーベルンゲンの歌』命令・要求表現の 580 例のうち suln (sollen) だけでも 181 例で約 30% の高い頻度の使用になる。詳しくは鈴木 (2018b) 参照。
- 17) 接続法による願望表現に関しては鈴木 (2018a) 参照。

テキスト

- Otfrid von Weißenburg *Evangelienbuch*. Auswahl Althochdeutsch/Neuhochdeutsch. Herausgegeben, übersetzt und kommentiert von Gisela Vollmann-Profe, Stuttgart (Reclam) 2010.
- Otfrids *Evangelienbuch*. Herausgegeben von Oskar Erdmann, Sechste Auflage besorgt von Ludwig Wolff. Tübingen (Max Niemeyer Verlag) 1973, Christi Leben und Lehre besungen von Otfrid. aus dem Althochdeutschen übersetzt von Johann Kelle. (Verlag von Friedrich Tempky) Prag 1870.
- Tatian: *Lateinisch und altddeutsch mit ausführlichem Glossar*: herausgegeben von Eduard Sievers. Paderborn (Verlag von Ferdinand Schöningh) 1872.
- Das Nibelungenlied*. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Nach der Handschrift B herausgegeben von Ursula Schulze. Ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse. Stuttgart (Reclam) 2015.
『ニーベルンゲンの歌』(前・後編) 相良守峯訳, 岩波文庫 1988 年。

参考文献

- Hennig, Beate (2014): *Kleines Mittelhochdeutsches Wörterbuch*. Berlin/Boston: de Gruyter.
- Behaghel, Otto (1924): *Deutsche Syntax, Band 2. Die Wortklassen und Wortformen*. Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung.
- Braune, W./Eggers, H. (1987¹⁴): *Althochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Dal, Ingerid (1966³): *Kurze deutsche Syntax Auf historischer Grundlage*. Tübingen: Niemeyer.
- Donhauser, Karin (1986): *Der Imperativ im Deutschen. Studien zur Syntax und Semantik des deutschen*

- Modusystems*. Hamburg: Buske.
- Erdmann, Oskar (1886): *Grundzüge der deutschen Syntax nach ihrer geschichtlichen Entwicklung*, Erste Abteilung. Stuttgart: Verlag der J. G. Gotta'schen Buchhandlung.
- Held, Karl (1903): *Das Verbum ohne pronominales Subjekt in der älteren deutschen Sprache*. Berlin: Mayer & Müller.
- Kaufmann, Magdalena (2012): *Interpreting Imperatives*. Dordrecht, Heidelberg, London, New York: Springer.
- Kaufmann, Magdalena/Poschmann, Claudia (2013): Embedded imperatives: Empirical evidence from Colloquial German. In: *Language* 89 (3), 619–637.
- Köbler, Gerhard (2014): *Althochdeutsches Wörterbuch*. (das ins Internet gestellte Wörterbuch)
<http://www.koeblergerhard.de/ahdwbhin.htm>
- Liedtke, Frank (1998): Grammatikalisierung und Imperativ – eine historisch vergleichende Skizze. In: Barz, I./Öhlschläger, G. (Hrsg.): *Zwischen Grammatik und Lexikon*. Tübingen: Niemeyer, 27–35.
- Paul, Hermann (1958⁴): *Deutsche Grammatik*, Band IV, Halle (Saale).
- Paul, H./Wiehl, P./Grosse, S. (1998²⁴): *Mittelhochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Schönherr, Monika (2011): *Modalität im Diskurs und im Kintext: Studien zur Verwendung von Modalitätsausdrücken im Althochdeutschen*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Schützeichel, Rudolf (2006): *Althochdeutsches Wörterbuch*. Tübingen: Niemeyer.
- Shimbo, Masahiro (1990): *Wortindex zu Otfrids Evagelienbuch*. Tübingen: Niemeyer.
- Simmler, Franz (1989): Zur Geschichte der Imperativsätze und ihrer Ersatzformen in Deutschen. In: Matzel, K., Roloff, H.-G. (Hrsg.): *Festschrift für Herbert Kolb zu seinem 65. Geburtstag*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 642–691.
- Simon, Horst J. (2003): *Für eine grammatische Kategorie ›Respekt‹ im Deutschen. Synchronie, Diachronie und Typologie der deutschen Anredepronomen*. Tübingen: Niemeyer.
- Suzuki, Yasushi (2018): Über die Imperativierbarkeit der deutschen Verben. In: *Energieia. Arbeitskreis für deutsche Grammatik* 43, 1–17.
- Weinhold, Karl (1967²): *Mittelhochdeutsche Grammatik*. Paderborn: Ferdinand Schöningh.
- Wilmanns, Wilhelm (1906): *Deutsche Grammatik. Gotisch, Alt-, Mittel- und Neuhochdeutsch. 3. Abteilung: Flexion*. Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner.
- 荻野蔵平・齋藤治之 (2005) : 『ドイツ語史小辞典』 同学社。
- 荻野蔵平・齋藤治之 (2015) : 『歴史言語学とドイツ語史』 同学社。
- 新保雅浩 (1993) 『古高ドイツ語 オトフリートの福音書』 大学書林。
- 鈴木康志 (2007) : 「ドイツ語命令・要求表現のさまざまな形態について―『ブデンプロック家の人々』を例として―『言語と文化』(愛知大学語学教育研究室) 第17号 49–71ページ。
- 鈴木康志 (2008) : 「ドイツ語話法の助動詞による命令・要求表現」『言語と文化』 第19号 1–20ページ。
- 鈴木康志 (2010) : 「lassen による命令・要求表現」『言語と文化』 第23号 17–33ページ。
- 鈴木康志 (2016) : 「命令文の主語について―不定代名詞を主語とする命令文を中心に―」『ドイツ

- 文学研究』(日本独文学会東海支部) 第48号 75-92ページ。
- 鈴木康志 (2017a) : 「ドイツ語の条件的命令文について」『言語と文化』第36号 29-44ページ。
- 鈴木康志 (2017b) : 「ドイツ語における勧誘表現について」『言語と文化』第37号 61-76ページ。
- 鈴木康志 (2017c) : 「ドイツ語命令形の形態について—2人称単数のe付き, eなしの問題を中心に—」『一般教育論集』(愛知大学一般教育研究室) 第53号 31-43ページ。
- 鈴木康志 (2017d) : 「敬称の命令・要求表現の歴史的変遷について—中高ドイツ語から新高ドイツ語まで—」『ドイツ文学研究』(日本独文学会東海支部) 第49号 73-86ページ。
- 鈴木康志 (2018a) : 「3人称に対する要求・願望表現について—接続法I式の用法を中心に—」『言語と文化』第39号 37-54ページ。
- 鈴木康志 (2018b) : 「中高ドイツ語における命令・要求表現について —『ニーベルンゲンの歌』を中心に—」『一般教育論集』第55号 45-58ページ。
- 高橋輝和 (1994) : 『古期ドイツ語文法』大学書林。
- 高橋輝和 (2003) : 『古期ドイツ語作品集』溪水社。
- 高橋輝和 (2015) : 『ドイツ語の様相助動詞』ひつじ書房。
- 武市 修 (1994) : 「duan, tuon, machen について」『ドイツ文学』(日本独文学会編) 第92号 55-65ページ。
- 戸澤 明 (1992) : 「CANTUS OBSCENUS LAICORUM —オトフリートとゲルマン英雄詩—」『美と捨身 中世ドイツ文学小識』同学社 所収 207-246ページ (初出は1974年)。